

## 芭蕉翁終焉記

其角

「やぶぢちゃん注…宝井其角が元禄七（一六九四）年に出した芭蕉追善集「枯尾花」の一節。底本は小宮豊隆校訂「芭蕉臨終記 花屋日記」（昭和一〇（一九三五）年岩波文庫刊）の「附録の一」を用いた。踊り字は「へ」「べ」は正字若しくは「々」に代えた。ポイント落ち割注は「」同ポイントで出した。なお、PDF版ではソフトの限界から一部の環境依存文字の正字が横転しているのは御寛恕願いたい。また「廻」の正字は表示されないので止むを得ず、新字を用いている。【二〇一四年十一月二十六日…藪野直史】

## 芭蕉翁終焉記

はなやかなる春は、かしら重くまなご濁りて心うし。泉石冷々たる納涼の地は、殊に濕氣をうけて夜もねられず、朝むつれたり。秋はたゞかなしびを添て、腸をつかむばかり也。ともかくもならでや雪のかれ尾花と、無常閉關の折々は、とぶらふ人も便なく立歸て、今年就中老衰なりと歎あへり。抑此翁、孤獨貧窮にして、徳業にとめること無量なり。二千餘人の門葉、邊遠ひとつに合信する因と隣との不可思議、いかにも勘破しがたし。天和三年の冬、深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり苦をかづきて、煙のうちに生のびけん、是ぞ玉の緒のはかなき初め也。爰に猶如火宅の變を悟り無所住の心を發して、其次の年夏の半に甲斐が根にくらして、富士の雪のみつれなければと、それより三更月下入<sup>ル</sup>無我<sup>一</sup>といひけん、昔の跡に立歸りおはしければ、人々うれしくて、焼原の舊草に庵をむすび、しばしも心とどまる詠にもとて、一かぶの芭蕉を植たり。雨中吟、芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉と侘られしに、堪閑の友しげくかよひて、をのづから芭蕉翁とよぶことになむ成

ぬ。その比、圓覺寺大巖和尚と申が、易にくはしくおはしけるによりてうかゞひ侍るに、或時翁が本卦のやうみんとて、年月時日を古曆に合せて筮考せられけるに、萃といふ卦にあたる也。是は一もとの薄の風に吹れ雨にしほれて、うき事の數々しげく成りぬれども、命つれなく、からうじて世にあるさまに譬たり。さればあつまるとよみて、その身は潛カならんとすれども、かなたこなたより事つどひて、心ざしをやすんずる事なしとかや。信に聖典の瑞を感じける。さのごとく草庵に入來る人々の、道をしたへるあまり、ともかくにも慰むれば、所得たる哉、橋あり、舟有、林あり、塔あり。花の雲鐘は上野か淺草かと眼前の奇景も捨がたく、をのをのがせめておもふもむつまじく侍れど、古郷に聊忍ばるゝ事ありとて、貞享初のとしの秋、知利をともし、大和路やよし野の奥も心のこさず、露とくとくこゝろみにうき世すゝがばや。是より人の見ふれたる茶の羽織、ひの木笠になん、いかめしき音やあられと風狂して、こなたかなたのしるべ多く、鄙の長路をいたはる人々、名を乞句を忍ぶこと安からず聞えしかば、隠れかねたる身を竹齋ナメに似たる哉と風の吟行に、猶々徳化して、正風の師と仰ぎ侍る也。近在隣郷より、馬をはせて來りむかふるも、せんかたなし。心をのどめてと思ふ一日もなかりければ、心氣いつしかに衰滅して、病ム雁のかた田において旅ね哉とくるしみけん、其年より大津・膳所の人人いたはり深く、幻住庵〔猿蓑に記あり〕義仲寺、ゆく所至る所の風景を心の物にして、遊べること年あり。元來、根本寺佛頂和尚に嗣法して、ひとり開禪の法師といはれ、一氣鐵鑄生ナメいきほひなりけれども、老身くづほるゝまゝに、句毎のからびたる姿までも、自然に山家集の骨髓を得られたる、有がたくや。さればこそ此道の杜子美也ともてはやして、貧交人に厚く、喫茶の會盟に於ては、宗鑑が洒落も教のひとかたに成て、自由體・放狂體、世擧つて口うつしせしも現力也。凡、篤實のちなみ、風雅の妙、花に匂ひ月にかゞやき、柳に流れ雪にひるがへる。須磨・明石の夜泊、淡路島の明ぼの、杖を引はてしもなく、きさがたに能因、木曾路に兼好、二見に西行、高野に寂連、越後の齋は宗祇・宗長、白川に兼載の草庵、いづれもいづれも故人ながら、芭蕉翁についてまぼろしにみえ、いざやいざやとさそはれけん、行衛の空もたのもしくや。「奥のほそ道といふ記あり」十餘年がうち、杖と笠とをはなさず、十日とも止る所にては、又こそ我胸の中を、道祖神のさわがし給ふ也と語られしなり。住つかぬ旅の心や置火燧、是は慈鎮和尚の、たびの世にまた旅寐してくさ枕ゆめの中にもゆめをみる哉とよませ給ひしに思ひ合せて侍る也。遊子が一生を旅にくらしてはつと聞得し生涯をかるんじ、四たびむすびつる深川の庵を又立出るとて、鶯や筭藪に老を鳴。人も泣るゝわかれなりしが、心待ちするかたがた、とにかくがましとて、ふたゝび伊賀の古郷に庵を

かまへ、「三日月の記有」爰にてしばしの閑素をうかゞひ給ふに、心あらん人にみせばやと、津の國なる人にまねかれて、爰にも冬籠する便ありとて思ひ立ち給ふも、道祖神のすゝめ成べし。九月廿五日、膳所の曲翠子よりいたはり迎へられし返事に、此道を行く人なしに秋の昏と聞えけるも、終のしをりをしられたる也。伊賀山の嵐紙帳にしめり、有ふれし菌クサビラの塊積ツカエにさはる也と覺えしかど、苦しげなれば例の薬といふより水あたりして、長月晦の夜より床にたふれ、泄痢度しげくて、物いふ力もなく、手足氷りぬれば、あはやとてあつまる人々の中にも、去來京より馳せくるに、膳所より正秀、大津より木節・乙州・丈艸、平田の李由つき添て、支考・惟然と共に、かゝる歎きをつぶやき侍る。もとよりも心神の散亂なかりければ、不淨をはぐかりて、人々近くも招かれず。折々の詞につかへ侍りける。たゞ壁をへだてゝ、命運を祈る聲の耳に入れるにや、心弱きゆめのさめたるはとて、

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

また枯野を廻るゆめ心ともせばやと申されしが、是さえ妄執ながら、風雅の上に死ん身の、道を切に思ふ也と悔まれし。八日の夜の吟也。各はかなく覺えて、

賀會祈禱の句

落つきやから手水して神集め	木節
凧の空見なをすや鶴の聲	去來
足がろに竹の林やみそさざい	惟然
初雪にやがて手引ん佐太の宮	正秀
神のるす頼み力や松のかぜ	之道
居上ていさみつきけり鷹の貌	伽香
起さるゝ聲も嬉しき湯婆哉	支考
水仙や使につれて床離れ	吞舟
峠こす鴨のさなりや諸きほひ	丈艸
日にまして見ます顔也霜の菊	乙州

是ぞ生前の笑納め也。木節が薬を死ぬ迄もとたのみ申されけるも、實也。人々にかゝる汚<sub>レ</sub>を耻給へば、坐臥のたすけとなるもの、吞舟と舍羅也。これは之道が貧しくて有ながら、切に心ざしをはこべるにめでゝ、彼が門人ならば他ならずとて、めして介抱の便とし給ふ。そもかれらも鬻にふれて、師につかふまつるとは悦びながらも、今はのきはのたすけとなれば、心よわきもことわりにや。各がはからひに、麻の衣の垢つきたるを恨みて、よききぬに脱ぎかはし、夜の衣の薄ければとて、錦繡のめでたきをとゝのへたるぞ、門葉のもの

どもが面目なり。

九日・十日はことにくるしげ成に、其角、和泉の府淡の輪といふわたりへまいりたるたよ  
りを、乙州に尋ねられけるに、なつかしと思ひ出でられたるにこそとて、やがて文したゝ  
めて、むかひ参りし道たがひぬ。予は岩翁・龜翁ひとつ船に、ふけるの浦心よく詠めて堺  
にとまり、十一日の夕へ大坂に著て、何心なくおきなが行衛覺束なしとばかりに尋ければ、  
かくなやみおはすといふに胸さはぎ、とくかけつけて病床にうかゞひより、いはんかたな  
き懷アホヒをのべ、力なき聲の詞をかはしたり。是年ごろの深志に通じて、住吉の神の引立玉ふ  
にやと歡喜す。わかのうちらにても祈つる事は、かく有るべしとも思ひよらず、蟻通の明神  
の物とがめなきも、有がたく覺待るに、いとゞ泪せきあげてうづくまり居るを、去來・支  
考がかたはらにまねくゆへに、退いて妄昧の心をやすめけり。膝をゆるめて病顔をみるに、  
いよいよたのみなくて、知死期も定めなくしぐるゝに、

吹井より鶴を招かん時雨かな

晉子

と祈誓してなぐさめ申けり。先頼む椎の木もありと聞えし幻住庵は、うき世に遠し。木曾  
殿と塚をならべてと有したはぶれも、後のかたり句に成ぬるぞ。其きさらぎの望月の比と、  
願へるにたがはず、常にはかなき句どものあるを、前表と思へば、今さらに臨終の聞えも  
なしとしられ侍り。露しるしなき薬をあたゝむるに、伽のものども寝もやらで、灰書に

うづくまる薬の下の寒さ哉

丈草

病中のあまりすゝるや冬ごもり

去來

引張てふとんど寒き笑ひ聲

惟然

しかられて次の間へ出る寒さ哉

支考

おもひ寄夜伽もしたし冬ごもり

正秀

鬮とりて菜飯たかする夜伽哉

木節

皆子也みのむし寒く鳴盡す

乙州

十二日の申の刻ばかりに、死顔うるはしく睡れるを期として、物打かけ、夜ひそかに長  
櫃に入れて、あき人の用意のやうにこしらへ、川舟にかきにせ、去來・乙州・丈艸・支考・  
惟然・正秀・木節・吞舟・壽眞が子次郎兵衛・予ともに十人、苦もる霏、袖寒き旅ねこそあれ、  
たびねこそあれと、ためしなき奇薬をつぶやき、坐禪・稱名ひとりびとりに、年ごろ日比  
のたのもしき詞むつまじき教をかたみにして、俳諧の光をうしなひつるに、思ひしのべる  
人の名のみ慕へる昔語りを、今さらにしつ。東南西北に招かれて、つひの栖を定めざる身

の、もしや奥松島・越の白山、しらぬはてしにてかくもあらば、聞て驚くばかりの歎ならんに、一夜もそひて、かばねの風をいとふこと本意也。此期にあはぬ門人の思いいくばくぞやと、鳥にさめ鐘をかぞへて、伏見につく。ふしみより義仲寺にうつして、葬禮義信を盡し、京・大坂・大津・膳所の連衆、披官・從者迄も、此翁の情を慕へるにこそ、まねかざるに馳來るもの三百餘人也。淨衣その外、智月と乙州が妻ぬひたてゝ着せまいらす。則義仲寺の直愚上人をみちびきにして、門前の少引入たる所に、かたのごとく木曾塚の右にならべて、土かいおさめたり。をのづからふりたる柳もあり。かねての墓のちぎりならんと、そのまゝに卵塔をまねび、あら垣をしめ、冬枯のばせうを植て、名のかたみとす。常に風景をこのめる癖あり。げにも所は、ながら山・田上山をかまへて、さゞ波も寺前によせ、漕出る舟も觀念の跡をのこし、樵路の鹿・田家の雁、遺骨を湖上の月にてらすこと、かりそめならぬ翁なり。人々七日が程こもりて、かくまでに追善の興行、幸とにあへるは予也けりと、人々のなげきを合感して、愚かに終焉の記を残し侍る也。程もはるけき風のつてに、我翁をしのばん輩は、是をもて回向のたよりとすべし。

於栗津義仲寺牌位下 晋子書

元祿七年十月十八日 於義仲寺

追善之俳諧

晋子

なきがらを笠に隠すや枯尾花

温石さめて皆氷る聲

行灯の外よりしらむ海山に

やとはぬ馬士の隣に來て居る

つみ捨し市の古木の長短

支考

丈草

惟然

木節

洗ふたやうな夕立の顔

李由

森の名をほのめかしたる月の影

之道

野がけの茶の湯鶉待也

去來

ウ

水の霧田中の舟をすべり行

曲翠

旅から旅へ片便宜して

正秀

暖簾にさし出ぬ眉の物思ひ

臥高

風のくすりを惣々がのむ

泥足

こがすなと齋の豆腐を世話にする

乙州

木戸迄人を添るあやつり

芝柏

葺わたす菖蒲に匂ふ天氣合

昌房

車の供ははだし也けり

探芝

澄月の横に流れぬよこた川

胡故

負々下て鴈安堵する

牝玄

菴の客寒いめに逢秋の雨

游刀

ぬす人二人相談の聲

蘇葉

世の花に集の發句の惜まるゝ

智月

多羅の芽立をとりて育つる

吞舟

二

此春も折々みゆる筑紫僧

土芳

打出したる刀荷作る

卓袋

四十迄前髪置も郷ならひ

靈椿

苦になる娘たれしのぶらん

野童

一夜とて未つむ花を寐せにけり

素顰

祭の留守に残したる酒

万里

河風の思の外に吹しめり

躰々

藪にあまりて雀よる家

這萃

鹽賣のことづかりぬる油筒

許六

月の明りにかけしまふ鮑

回鳥

秋も此彼岸過せば草臥て

荒雀

くされた込みに立し鶏頭

楚江

小屏風の内より筆を取亂し

野明

四ツになる迄起きねば寝る

風國

ニテ

ねんごろに草鞋すけてくるゝ也

木枝

女人堂にて泣もことほり

晋子

ひだるさも侍氣にはおもしろく

角上

ふるかふるかと雪またれけり

之道

あれ是と逢夜の小袖目利して

去來

椀そろへたる藏のくらがり

土芳

呑かゝる煙管明よとせがまるゝ

芝柏

ふとんを巻て出す藥物

臥高

弟子にとて狩人の子をまいらする

尚白

月さしかゝる門の井の垢離

昌房

軒の露薙敷たるかたゝがへ

丹野

野分の朝しまりなき空

丈草

花にとて手廻し早き旅道具

惟然

煮た粥くはぬ春の引馬

靈椿

小機嫌につばめ近よる塀の上

正秀

洗濯に出る川べりの石

回鳧

日によりて柴の直段もちがふ也

朴吹

袋の猫のもらはれて鳴

角上

里迄はやとひ人遠き峯の寺

泥足

聞やみやこに爪刻む音

尚白

七ツからのれども出さぬ舟手形

卓袋

二季ばらひにて國々の掛

芝柏

内に居る弟むす子のかしこげに

探芝

うしろ山迄刈寄る萱

游刃

此牛を三步にうれば月見して

楚江

すまふの地取かねて名を付

魚光

社さえ五郎十郎立ならび

晉子

所がらとて代官を殿

風國

三ツ

打鎰に水上帳を引かけて

支考

乳母と隣へ送る啼兒ムシ

正秀

獅子舞の拍子ぬけする晝下リ

丈草

雨氣の雲に瓦やく也

昌房

在所から醫師の普請を取持て

臥高

片町出かす畠新田

之道

鳥さしの仕合わろき昏の空

去來

木像かとして椅子をゆるがす

泥足

三重がさねむかつくばかり匂はせて

尚白

座敷のもやうかふる名月

卓袋

漣や我ものにして秋の天

角上

經よむうちもしのぶ聖靈

牝玄

かるがると花見る人に負け來て

土芳

村よりおろす伊勢講の種

芝柏

ナラ

暖になれば小鮎のなれ加減

這萃

軍ばなしを祖父が手の物

臥高

淵は瀬に薩唾の上を通る也

晉子

朝日に向きて念珠押しむ

正秀

幾人の著汚つらん夜著寒し

支考

わすれて替ぬ大小の額

魚光

味噌つきは沙禰に力をあらせばや

楚江

かな聲の何か可笑しき

游刀

ばらばらと恨之助をとりさがし

風國

顔赤うするみりん酒の酔

之道

白鳥の鎗を葛屋に持せかけ

探芝

三河なまりは天下一番

去來

飯しゐに内義も出るけふの月

尚白

功者に機をみてもらふ秋

回鳥

ナウ

うそ寒き堺格子の窓明り

芝柏

文庫をおろす獨山伏

土芳

浮雲も晴て五月の日の長さ

惟然

海へも近き武庫川の水

丈草

寮にゐる外より鎖をかけさせて

牝玄

思はぬ寺の奥に戒名

支考

青天にちりうく花のかうばしく

去來

巢に生たちて千里鷺

正秀

右四十三人満座興行。大津・膳所・京・嵯峨・攝津・伊賀之連衆也。

各感<sup>シテ</sup>「愁眉<sup>ヲ</sup>而不<sup>レ</sup>求<sup>ニ</sup>巧言<sup>一</sup>也。

「やぶちちゃん注…靈椿の句「四十迄前髪置も郷ならひ」の「郷」の傍線はママ。意味不明。音訓というのもおかしく、連句の何かの約束事を示すものか？ 識者の御教授を乞うものである。また、野明の句「小屏風の内より筆を取亂し」の「筆」の右には半角の「？」が附されてある。判読字不審ということか？」